

アルゼンチン日本語文芸論 — 『あるぜんち ん日本文藝』について—

守屋, 貴嗣 / Moriya, Takashi

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化. 論文編 / 異文化. 論文編

(巻 / Volume)

14

(開始ページ / Start Page)

59

(終了ページ / End Page)

90

(発行年 / Year)

2013-04

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008694>

アルゼンチン日本語文芸論

— 『あるぜんちん日本文藝』 について —

守屋 貴嗣

MORIYA Takashi

序

アルゼンチンへの日本人の移住は、1886年に入国した定着移民第一号の牧野金蔵、その14年後の1900年に正規移民第一号として移住した榛葉賀雄しんやよしおと鳥海忠次郎を考慮しても、すでに110年以上が経過している。アルゼンチンへ向かった日本人は、ブラジルやペルーのような日本との移住協定に依拠した集団契約移民としてではなく、移住協定が未だに締結されないまま、個々人の自由渡航者として移住を開始した。そのため、近隣のラテンアメリカ諸国とは異なった歴史を辿ることになった。その歴史を書きとどめた書籍は数多く存在する。日本人アルゼンティン移住史マ編纂委員会によって出版された『日本人アルゼンティン移住史』(1971)や、鑑賞花卉園を最初に創業したことで知られる、賀集九平によって著された『アルゼンチン同胞八十年史』(六興出版、1981・8)^(註1)、1898年に締結された修好通商航海条約の、100周年を記念した『日本アルゼンチン交流史』(日本アルゼンチン修好100周年記念事業組織委員会・社団法人日本アルゼンチン協会、1998・12)などが主立ったものである。なかでも『アルゼンチン日本人移民史』(アルゼンチン日本人移民史編纂委員会・社団法人在亜日系団体連合会(FANA))は、第一巻・戦前編(2002・6)と第二巻・戦後編(2006・8)に分けられ、スペイン語版も出版されているアルゼンチンへの日本人移民史を網羅した大著である。その第二巻・戦後編には、日系社会の文芸活動について、次のような記述がある。

文芸活動も花卉業者が邦字紙の文芸欄を独占し、「ら・かなすた」、「亜都文学」、「アロマ吟社」、「空瓶（あきびん）会」、「拓人文化」、「地平線」、「ばちゃまま」など小説、詩、短歌、俳句、川柳の同人誌に足跡を残し、定型俳句の「南魚座吟社」、自由律俳句の「層雲・マテ茶の会」、女流俳句の「ハカラダの会」、「マテ茶文芸会」、「川柳ブエノス」、など多彩な文芸グループの中核となって活躍した。（235頁）

この文章は、花卉園芸業の団体である「ニッパル花卉産業組合」（後に「ブエノス・アイレス花卉産業組合」に改組）が、「日本人間の親睦と団結を計るとともに当時の情勢下で一刻を争う情報の連絡の必要性」（前出『アルゼンチン日本人移民史 第二巻戦後編』229頁）からニッパル・クラブを作り、文化事業の一環として図書部を設け、日本からの書籍雑誌を購入して会員の利用を図ったことが述べられ、その効用として文芸活動が活発になったことが記されている一節である。ここに併記されている同人誌は、刊行された時期は若干異なるが、アルゼンチンの日系社会で多くの日本語文芸誌が創刊され、また、多くの文芸団体が設立されたことがわかる。3万人程度と言われた日系移民の規模から考えれば、旺盛な創作意欲が発揮されていると言えよう。しかし、ここに記されていない重要な文芸団体と文芸同人誌が存在した。それが「アルゼンチン日本文芸会」であり、その会誌『あるぜんちん日本文藝』である。

本稿では日本語文芸同人誌（紙）である『あるぜんちん日本文藝』を時間軸とともに確認し、当時のアルゼンチンにおける日系社会での文芸活動と、同誌（紙）が果たした意義を明らかにすることを目的とする。

1. 『あるぜんちん日本文藝』刊行時期

『あるぜんちん日本文藝』の創刊は1968年9月である。創刊3ヶ月前に「アルゼンチン日本文芸会」という日本語文芸同人会が結成され、その会誌として刊行される。「アルゼンチン日本文芸会」は、らぶらた報知社初代社長・平良賢夫の提言により、菊池喜代治（一路）と戸塚九平（静想）が表立っての代表となり、崎原朝一（風子）が幹事として手伝い役になり、らぶらた報知社内に事務所を置くこととして創設された。同人会員制を組織し、「在亜同胞社会における日本文芸の興隆と進歩に貢献し、特に新人の育成と指導に力を表す」（「日本文芸会『同人会員』推選に関して」、第4号、1969・5）ことをその目的とした。

同人誌といっても、すべての印刷がらぶらた報知社で行われており、その形態は『らぶらた報知』と同じ大きさ、つまりは新聞紙である。最終号となった第66号（1985・9）までの大半は新聞紙1枚の両面2頁であり、『らぶらた報知』の文芸版、あるいは特集版のようでもある。前述のように、会事務所は「らぶらた報知社内」にあり、社長の平良賢夫は賛助会員であり、『あるぜんちん日本文藝』の刊行に対しては全面協力する旨を述べている。1970年の平良急逝後も、二代目社長・比嘉良秀は遺志を引き継ぎ、「私は紙面提供に関する限り、従来通り全面的協力を惜しまない所存でおる。その他についても出来る範囲の支援はする積りである」（「総会記」、第38号、1975・8）と述べ、『あるぜんちん日本文藝』刊行への協力を約束し、「アルゼンチン日本文芸会」の総会にも編集長の高木一臣とともに毎回出席している。らぶらた報知社の協力が無ければ、「アルゼンチン日本文芸会」の存続も『あるぜんちん日本文藝』の刊行も継続されていなかっただろう。当時の『あるぜんちん日本文藝』編集委員会からは「らぶらた報知社からは、用紙代も送達費も無料提供されています。それでモノタイプと印刷工に対する謝礼として毎回一万ペソを差上げていますから御諒承下さ

い」(「報告一束」、第8号、1970・1)と述べられており、そのことを裏付けている。

そのようならぶらた報知社全面協力の下ではあるが、「日本文芸は一部の人達が思っている様に新聞の附録や文芸欄ではありません。言うまでもなく、純然たる文芸会の会誌であり同人誌であります。今の姿では誤解されても仕方がないが、当事者はその独自の誇りを持って発行しています」(「姿勢」、第13号、1970・11)と、初代会長である菊池喜代治(一路)は述べている。形式としてはあくまでも文芸同人誌(紙)として刊行されていくのである。会誌としては最終号となる1985年9月刊行の第66号まで、その形式は変わることなく継続されたのである。^(註2)

題号は、創刊号から第5号(1969・7)までは『季刊日本文藝』として、年2回から3回のペースで刊行された。第6号(1969・9)から『隔月刊日本文藝』と改題して隔月刊行となり、第10号(1970・5)以降は『あるぜんちん日本文藝』と改題され、以降第66号まで改題されることなく刊行された。刊行ペースは、第35号(1974・9)までは隔月刊が守られている。第36号(1975・1)から季刊ペースである年3回から4回の刊行となり、第46号(1978・8)は、この1978年唯一の刊行となり、刊行中では最も休刊の危機に瀕した時期であった。しかしらぶらた報知社の印刷事情も好転し、第66号(1985・9)まで季刊ペースでの刊行が続いた。

「アルゼンチン日本文芸会」が体制を整えるのは第4号(1969・5)からで、初代会長に菊池喜代治(一路)、編集人に戸塚九平(静想)、幹事に崎原朝一(風子)3名の「編集委員」体制が確立している。

菊池喜代治の俳号は一路。秋田県出身。花卉栽培業に携わり、コリエンテスの「アルゼンチン花卉産業組合」創設には尽力した人物である。秋田県人会である「在アルゼンチン千秋会」会長でもあった。『あるぜんちん日本文藝』創刊時の代表であり、会長、編集長を歴任した。

第17号(1971・7)の時点で「引退」を宣言し会長を辞するが、『あるぜんちん日本文藝』には俳句、随筆といった投稿を続けている。アルゼンチン移民史資料編纂委員長も務めた。1983年2月、心臓麻痺で逝去。第61号(1983・7)では「菊池一路・追悼特集」が組まれている。

戸塚九平の俳号は静想。1904年静岡県出身。1924年渡亜し、牧場労働、別荘番、蔬菜栽培などを経験し、花卉栽培業を営む。崎原風子と同じく「南魚座吟社」のメンバーである。句風には加藤楸邨の影響が見られる、と自筆している。『あるぜんちん日本文藝』第46号(1978・8)では「静想俳句特集」が生まれ、略歴も掲載されている。会長、編集責任者を歴任している。

崎原朝一^{ちやういち}の俳号は風子。1934年沖縄生まれ。1951年に渡亜し、洗染業に従事するも、後に数年の日本への出稼ぎを経て『らぶらた報知』記者となり、現在は日本語紙面編集部長。『アルゼンチン日本人移民史』(前出)編纂も手掛けた、アルゼンチン日系社会における生き字引的存在である。金子兜太の俳句結社「海程」には第6号から参加し、第2回海程新人賞を受賞。アルゼンチン・ブエノスアイレスの俳句結社、南魚座吟社の中心メンバーである。「アルゼンチン日本文芸会」では幹事、会計、編集、会長を歴任し、『あるぜんちん日本文藝』全号の刊行に多大なる貢献をした人物である。『崎原風子句集』(海程新社、1980・12)がある。

この3名が中心となって『あるぜんちん日本文藝』は刊行されていく。発行に関しては、第1号から第9号(1970・4)までが編集代表・菊地喜代治、発行・日本文芸会である。第10号(1970・5)から第16号(1971・5)までが編集・戸塚九平、発行人・菊地喜代治、第17号(1971・7)から第29号(1973・9)までが編集・崎原朝一、発行人・戸塚九平、第30号(1973・11)から第37号(1975・6)までが編集・大城光三郎、発行人・戸塚九平、第38号(1975・8)から第49号(1979・

11) まだが編集・大城光三郎、発行人・崎原朝一、第 50 号 (1980・7) のみ編集・崎原朝一、発行所・アルゼンチン日本文芸会になっている。第 51 号 (1980・10) から第 54 号 (1981・8) まだが編集・崎原朝一、発行人・房本徹、第 55 号 (1981・10) から最終第 66 号までは編集・崎原朝一、発行人・鈴木旦而となっている。編集者が変わると、当然誌 (紙) 面にも変化が表れる。特に特集企画に焦点を当てることで、以降『あるぜんちん日本文藝』の特徴を見ていきたい。

同人会員の会費は、最初、年間 2000 ペソ (1969 年) だったものが 1972 年 (第 23 号) には 5000 ペソ、1974 年 (第 33 号) に新ペソとなって 50 ペソ、1976 年 (第 41 号) には「物価高騰のため」300 ペソ、1977 年 (第 45 号) には「インフレの進行に対処するため」1000 ペソ、1979 年 (第 49 号) には 20000 ペソに跳ね上がり、1980 年 (第 51 号) には 30000 ペソ、1981 年 (第 54 号) には 50000 ペソ、1982 年 (第 58 号) には 100000 ペソまで引き上げられた。この年会費引き上げの背景には、国家のハイパーインフレーションがある。『あるぜんちん日本文藝』が刊行されていた時期は、アルゼンチン国政の激動期でもあった。

1964 年のブラジルにおける軍事政権の成立以降、アルゼンチン、ペルー、ボリビアといったラテンアメリカの国々に加え、従来一定の民主主義的伝統を持っていたチリ、ウルグアイでも軍政が敷かれていく。さらに 70 年代にかけて、コロンビア、メキシコ、コスタリカ、ベネズエラを除くほとんどのラテンアメリカの国々で軍事政権が成立する。ラテンアメリカは以前からも軍事クーデターの多発地帯であり、軍事政権自体は珍しいことではない。以前にもラテンアメリカ諸国における軍政の多くは、クーデター首謀者がその軍事力を背景に個人独裁の政治を行う、あるいは社会的混乱の秩序回復のため、短期的に軍が登場する例はあった。しかしこの時期ラテンアメリカに登場した軍事政権は、軍事クーデター指導者の個人的影響力や派閥的利権といっ

た範疇を越えて、陸・海・空軍が軍機構全体として軍事クーデターに参加した。軍は高度に専門職業化、そして官僚化し、社会主義革命から国家を防衛するためにクーデターを実行し、左翼を弾圧するだけではなく、軍独自の経済発展政策、社会政策を掲げて国家の運営を行っていく。そのため、政権は一時的危機管理ではなく、長期政権を目指していくことになる。また経済政策をテクノクラートに委ねることによって、合理的に運営することも目指した。その合理的運営の妨げとなる政治的反対派、社会的要因を強制的に排除するために、弾圧政策を取ったのである。

ラテンアメリカの軍事政権は、急速な治安の回復には成功する。しかし、軍・準軍事組織による暗殺や行方不明者の増大は国際的批判を巻き起こし、左翼のみならず民主主義者をも含んだ広範な軍事政権反対の闘いを生み出していくことになる。

こうしたラテンアメリカにおける軍政の典型的事例がブラジル、アルゼンチン、チリ、ウルグアイにおける軍政である。これらの諸国はラテンアメリカの中でも、比較的工業化が進んだ国であった。近代化が進んでいると思われていた諸国で、最も保守的で、最も抑圧的な軍事政権が成立したのであった。

これらの国に共通するのは、長期にわたって、民族主義的で革新的なポピュリズム政権が成立したことである。アルゼンチンのペロン政権、ブラジルのバルガス政権、チリの人民戦線政権などである。こうしたポピュリズム政権の挫折と、その政策が引き起こした政治的、経済的、社会的混乱の收拾を目的として、これらの国の軍事政権は登場した。そのような長期軍事政権を正当化させていたのが、安定した投資環境の整備と合理的行政こそが経済成長をもたらす、という主張だった。そのために民間のテクノクラートが多数採用され、経済運営を担っていくことになったのである。

こうした軍事政権の政策は、革命を阻止するためにラテンアメリカ

に積極的に介入してきたアメリカ合衆国にとって望ましい政策であった。これこそアメリカが「進歩のための同盟」以来、ラテンアメリカで押し進めようとしてきた「改革なき近代化」路線そのものだったためである。特にブラジルの軍事政権は、ニクソン政権下でアメリカがもっとも信頼すべき政権として、積極的に支援されることになった。

アルゼンチンでは、1966年6月には第一期長期軍政の起点となるオンガニア軍政がはじまり、1973年にはペロニスタ党がエクトル・カンボラを擁立し、ペロニスタ政権が復活する。すぐにイサベル・ペロン自身が大統領に返り咲くも、1974年にペロン大統領が急逝し、1976年から第二期長期軍政であるラファエル・ビデラ軍政が始まるのである。そして、1982年4月にはマルビーナス紛争（フォークランド紛争）も起きる。

アルゼンチンでは、マネタリズムによる経済自由化政策がとられ、輸入代替政策は壊滅し、経済的後退に追い込まれることになる。結果としては、貧富の差が拡大することになり、財政は莫大な累積債務を残すことになった。

当初「自由主義」的な制度的枠組みの下で、有利な国際環境に恵まれたアルゼンチンは外向きの高度成長を実現した。戦間期にそうした好条件が失われ、かつてない危機の下で工業化を迫られると、「自由主義」は徐々に後退し、国家と社会による規制が広がりを見せ始めた。その経済調整効果は必ずしも充分ではなかったが、戦後はその延長線上での規制が一挙に強まり、ポピュリズム型の開発計画の下で輸入代替工業化が推進された。しかし、度重なるスタグフレーションは経済の衰退を促進し、社会は次第に閉塞感に包まれるようになる。この傾向は1973年に成立したペロニスタ政権で頂点に達し、当初の消費主導型成長と、その直後の激しいスタグフレーション、テロリズムを伴う政治の両極化、社会不安などが続発する結果となった。深刻な政治経済危機の中で、軍部は1976年3月にクーデターを敢行し、社会的

な規律づけの手段として、市場の論理を重視する新自由主義改革を断行した。しかしアルゼンチン経済は、一連の「自由主義」症候群の果てに「失われた10年」を経験し、1990年代にも第2次新自由主義改革の下で、再び「自由主義」症候群に陥っていく。それは全体として「失われた25年」とも呼ぶことができる。

そのような国情で、アルゼンチン日系社会にも様々な問題が引き起こされていた。日系社会の混乱による事件や、移民一世の高齢化と移民二世の成長に伴う世代間の問題も含まれた沖縄県人連合会内紛や日系移民百年祭紛争と言われるものが代表的である。

そのような時期に『あるぜんちん日本文藝』は刊行され続けたのであった。それでは、『あるぜんちん日本文藝』の内容を見ることで、その特徴を確認していきたい。

2. 総合文芸同人誌としての存在

1968年9月に創刊された第1号は、前述したように『季刊日本文藝』という題号である。編集・発行は「アルゼンチン日本文芸会」、印刷は「らぷらた報知」、新聞紙1枚両面、計2頁でのスタートである。「編集後記」を見てみると、「編集委員の寄りが悪いので風子を助手にして招集、大いに働いてもらってやっと骨組みが出来た」と書かれており、担当者として「風子、静想、一路」の名が記されている。

第1号から一貫している特徴は、様々な作品ジャンルを網羅し、掲載していることである。第1号では自由詩7編、随筆3編、民謡1編、童謡1編、短歌4名・計20首、俳句10名・計58句、川柳6名・計39句、短文1編が掲載されている。中心となっている前述の編集委員3名はみな俳人なのだが、俳句に留まらず、広く日本語文芸作品を求め、掲載していく姿勢が示されている。

○短歌

パライソの落葉散りたるそこばかり夕陽

あかるき路をもとほる

川村さとし

○俳句

ポンチョ着てなぜか人々にうとまるる

戸塚静想

○川柳

スペイン語たしかな方は辞書をひく

守屋斗京

ミシオネス地主は蟻か人様か

西田義雄

上記のようなアルゼンチンらしさ溢れる作品が掲載された。他にも奈良賀男「巨艦陸奥の最後」は、自身が乗船したことのある軍艦についての随筆で、移民一世でなければ書けない作品であった。「連絡室」という通信欄では、問い合わせに対して編集からの返答が掲載され、「用紙がまちまちで編集部が大変です。便せん程度にして下さい裏書きも絶対困ります」という、現在から見ると微笑ましいコメントも載せられている。アルゼンチン日系社会における総合的な文芸同人団体として存在していく意識が、編集側だけではなく、同人として参加した人々にも共有されていたことがわかる。

第4号（1969・5）では、「文芸會改組御報告」が掲載されており、「アルゼンチン日本文芸会」が組織化されていく様子をうかがうことが出来る。

一、新たに同人制とし、役員は置かない。同人は寄稿家層から広く求め、第一期三十名以上を推選し同意を得ること。同人は最低の寄稿義務を分担する（年二回以上）。同人は承諾と同時に年額二千ペソ又は^マチェ^マツケで、本会事務所菊地宛送金すること。この会費は原則として経常費に当てる。

一、編集委員三名を同人中より選定する。編集委員は現状維持と

し（菊地、戸塚、崎原三氏）一切の庶務会計を司る。

一、当分現状維持で、らぶらた報知に依存する。

一、本会の目的を新人の育成と文芸作品の向上進歩に置くことに
変りはない。

このように、会の運営をしっかりと行っていこうという意志が示されたのである。「編集室から」の欄にも「同人制をガッチリ組んで、不動の体制を固めます。いずれ依頼状を寄稿家諸子に送りますが、自発的な申込も受付けますから連絡して下さい。寄稿の確保と経常費の解決が目的です」と書かれている。すでに「アルゼンチン日本文芸会」発足から半年ほど経過していた時期で、ようやく体制確立の表明であったと言えよう。同欄の記載は「分類の面では、川柳と童謡が一番弱い。作家の意欲が足りないのだ」と、作品の質的向上に向けて、寄稿者への叱咤も続いている。そして、編集者3名による、全ての作品についての「寸評」も始まっている。「○随想。短文＝一千字程度／○創作（短篇）＝二千字程度／○自由詩＝一枚程度／○民謡、歌謡、童謡＝自由／○短歌、琉歌＝十首まで／○俳句、川柳＝十句まで」（第6号原稿募集）との内容で原稿募集も規定され、すべての文芸ジャンルの作品を募集していく体制が決定された。

3. アルゼンチン各地の同人会員

第6号（1969・9）は、『あるぜんちん日本文藝』にとって最良の時期だったのではないだろうか。「事務報告」では、同人入会申し込みが予想以上で、53名に達し、「編集部一同感激しております」とのコメントを載せている。そして、「本会同人会員名簿」として居住地区と氏名を掲載している。アルゼンチン日系移民の特徴として挙げられるのは、そのほとんどがブエノスアイレス周辺に居住したことである。そのため近郊栽培としての野菜栽培、洗染業やカフェ従業員などが、

日系人が就く職業として代表的であった。そのため、ここに記載されている同人の居住地もブエノスアイレス周辺の地名が多いが、しかしそればかりではない。ミシオーネス、メンドーサ、ポサーダスといった、ブエノスアイレスから遠方の地名も多々見られる。つまり、アルゼンチン各地に住む同人会員によって、「アルゼンチン日本文芸会」は成り立っていたことがわかる。

資金の処置:早速らぶらた社の印刷に対して薄謝を差上げました。残金は全部東銀に入れて十四万ペソ程あります。創立からの組織費や諸雑費の赤字も決済しました(「事務報告」)。

「東銀」とは東京銀行ブエノスアイレス支店のこと。同人会員増加による会費納入によって、初めて運営費に余裕が生まれたことが切実に言い表されている。そして、題字が「隔月刊日本文藝」に変更されたことからわかるように、年6回の刊行になる。「姿勢」という文芸批評欄も新たに作られ、「日本文芸会の意義と姿勢を」方向付けたとの結論で、「K生」=菊地一路は次のような提言を行っている。

「亜国日本文芸」は、乏しいその火をいつくしみ、かき立てて燃えあがらせようとする試みに他ならない。だから、故国日本の現代文学の範チュウであっても、その移植でもないし、模倣ではむろんない筈だ。(略) 巷間偶々、日本の書籍雑誌を対照として、異端とか幼稚とか評価されるようだが、私達はその見解にこそ反撥と啓モウを続けて行かねばなるまい。

外地の日本語文学は「日本文学」なのか、という問いは、他の植民地で刊行された媒体の例を挙げるまでもなく、戦前から内地・外地で問われているが、ここでもその系譜の問いが存在していることが示さ

れている。しかし菊地は、創作者の視点から「文芸は生活である。生活の息吹である」として、日本とアルゼンチンの生活の違いをそのまま文芸創作の基盤として表現し、それこそが「アルゼンチン日本文芸会」の向かうべき方向である、と提言するのである。

4. 「コロニア」との繋がり

第15号（1971・3）には、次のような「予告」が掲載されている。

来る四月十八日入港予定のあるぜんちな丸でブラジル俳句会の大御所佐藤念腹宗匠、東山農場専務夫妻等一行八名の来亜が予定されておりますについては本会の主催を以って歓迎の一夕を設けたいと思いますので、文芸人多数の出席を希望します。

ここに記されている佐藤念腹（1898～1979年）は、ホトトギスの門人で、高浜虚子から饒別に「畑打って俳諧国を拓くべし」の句を寄せられ、1927年にブラジルに移住している。念腹は虚子の唱える「客観写生」「花鳥諷詠」を理念とし、自然をそのままに詠んだことがその特徴として挙げることが出来る。念腹は戦後、ブラジル邦字紙『パウリスタ新聞』の俳句欄初代選者になり、また、現在もブラジルで刊行され続けている俳句誌『木蔭』を創刊するなど、1950年代のコロニア俳句全盛時代を担った人物である。

そして「予告」の結果報告として、『あるぜんちん日本文藝』第16号（1971・5）には、次のような記事が掲載された。

伯国俳句会の大御所佐藤念腹一行四名が、四月十九日来亜されたので、前後四日間本会が中心となって歓迎や案内をした。初日はボーカ見物とペスカディートの夕食会、二日目市内見物、三日目ルハン吟行、四日目の朝パソ・デ・リエブレ經由婦伯四人共大変

満足されて行きました。（「事務報告」）

参加者も、「アルゼンチン日本文芸会」以外には、南魚座吟社、マテ茶文芸会、川柳ブエノス、ハカランダ句会などが中心で、ブラジル俳句界とアルゼンチン俳句界との交流の意味合いが強い。その後も句誌の交換が行われていることから、アルゼンチン、ブラジル両国の俳壇において、重要な歓送迎であったと言える。

時代は下るが、第29号（1973・9）では「ブラジルの風土と文学」特集が組まれている。弘中千賀子「『やし樹』の位置」、間島稲花水「ブラジル俳句の現況」、杉村次郎「——私における『コロニア文学の土着性』」が掲載されている。これはブラジルで発刊された『コロニア文学』が20号記念特集を組んだ際の抜粋であり、ブラジル・コロニア文学の現状と、それを比較対象としながら、アルゼンチンにおける日系文学が考慮されている。ちなみに『コロニア文学』20号は、1973年4月刊行、全208頁というふ厚い特集号であった。

ブラジルのコロニア文学の最高目標は「日本のみに理解されるだけでなく、広くブラジル・ラテン文化に働きかけるだけの力は是非持たねばならない」という自覚に達している。（略）亜国日本文芸がそこ迄問題を意識していないのは底辺が狭い為だろうか（「余筆」）

「やがて日本語の消滅する時間がある」とブラジルの文芸人はしばしば強調する。日系人七十万、日本語の中にどっぷり浸っておられる社会があるから消滅する時間がひしひしと感じられるのか。準二世層というはっきりした層が在るのも特異であり、移民社会として、また文学の領域でも立体性をもつことになる（「編集後記」）

「余筆」欄は大城光三郎、「編集後記」は崎原風子の筆である。お隣のブラジルの日系社会の規模の大きさを念頭に置き、「コロニア」の存在を認識し、アルゼンチン日系社会という自らの存在を再考慮している。以後も『コロニア文学』との関係は続いている。第41号(1976・7)では、崎原風子「T氏への手紙」が掲載されている。これは『コロニア文学』から派生した、『コロニア詩歌』を創刊号から8号まで受け取り、その読後感を述べた内容である。

われわれにとって「日本語」文学の延命策の問題は切実ではないのです。切実ではない、と言うとウソになりますが、三万五千人という日系人を含む日本人社会を背景にして「日本語」文学が減びるのは当然であり、切実さを通りこした上でのどうしようもない定められた行程として受けとろうとしているのです。つまり、延命策を口にすることもできないのが実情なんです。ブラジルの日本人社会が「切実さ」を感じるところに、まだ残されたエネルギーの大きさを感じます。

「コロニア」を形成する者たちの絶対数の違いが、「日本語」に対する意識の相違を生み出していることに注目している。日本を祖国としながらも、日本の外で定住している者たち、世代間、「主体」としての本来の意味のアイデンティティの問題として論旨は進んでいくのであるが、日本人としての同心性と同質性ととも、創作者たちの日本語意識に対する差異を明確に感じ取り、対比することでアルゼンチン日系社会の現状を認識し、その上で日本語での文芸創作を行っていくことの問題を考慮している文章である。

第49号(1979・11)では、日系移民70周年記念刊行『コロニア万葉集』への投句が呼びかけられている(「日本文芸会ニュース」)。佐藤念腹の来亜時の歓送迎も含め、コロニア文学界との繋がりを持つ団

体として、「アルゼンチン日本文芸会」は存在していたのである。

5. 日本文壇との関係

第19号(1971・11)では「三島・あれから一年—三島事件における還相回向—」特集が組まれている。「あれから一年」とは、当然作家・三島由紀夫による楯の会自衛隊市ヶ谷駐屯地での切腹自死を指している。特集では、中村定「三島における生と死」^(註3)の日本からの寄稿原稿やドメニコ・ガラナ(在アルゼンチンのイタリア人日本文学研究家)「三島由紀夫」、高木一臣(『らぶらた報知』編集長)「芸術家・三島由紀夫」、大城光三郎(『あるぜんちん日本文藝』編集者)「三島の諫死」などが掲載された。寄稿者それぞれの視点と論旨をもって書かれており、自死から一年経過した時点でもその衝撃の大きさが表れている。ただ、三島の文学作品に立ち帰って文学論として書いているものは無く、「信念の為には敢えて死も辞せずという不動の心情を身をもって証明して見せた一種の政治的象徴行為と見るべきだ」(大城「三島の諫死」)、「時と共に彼に対する社会的評価は変わるかも知れないが、彼自身の芸術的評価は永久に変わることはないだろう。何故なら、純粋、こそ何時の時代においても、芸術、の本質であり、純粋に生きようとする意思は純粋の死の観念につながるものだからである」(高木「芸術家・三島由紀夫」)といった論旨で、死という事象として論じられていることは指摘出来よう。これは『あるぜんちん日本文藝』のみのことではない。『コロニア文学』第14号(1971・3)においても「三島由紀夫の死とその反響」という特集が生まれ、日本の新聞雑誌掲載文を転載し、「コロニアの反響」として、ブラジル邦字新聞での掲載紙と著者・題名を一覧にしている。特集を組んで取り上げることで、日本文壇との近隣性を示したいと見ることができるだろう。

第8号(1970・1)、第9号(1970・4)には、菊地一路「日本の地方文藝とはどんなものか—文芸同人誌を散見して—」が掲載されてい

る。前述したように、アルゼンチンにおける日本語文芸が「日本文学」の範疇に属するものである、との認識を記した菊地が、現時の日本の地方同人誌と『あるぜんちん日本文藝』を同列に位置づけようとし、その為の具体例として作品を取り上げながら論じている。

一体日本の現代の農村や町や郡や市などの単位グループが、どの程度のどんな作風の系列で、文芸をしているか。手元にある（大体は秋田県内市町村にあるグループ）同人誌から拾い上げて見度いと思う。人口からみても二、三万の町村がアルゼンチンにもあると思へばいい（第8号）。

「八島さんが手にとれば杉はこけしとなり小松さんがこねし土はナヲ岡焼」「どくだみの匂う小路を曲るとき祭りの笛の高なりて止む」といった、地方農村特有の生活描写が表れている短歌、俳句や詩作品が多く取り上げられ、文芸を愛好する生活者の姿が浮かんでくる。これは、日本内地だからといって一流商業文芸誌のみを想起してしまうことはないのだ、との提言であろう。ニッパル花卉協同組合の図書部では、『文芸春秋』や『新潮』といった文芸誌は大変よく売れており^(註4)、アルゼンチンの日系文芸関係者の多くがよく目にしていたことは事実である。そこに掲載される有名作家ばかりではない、地方同人誌に掲載される作家たちの存在を紹介することで、同人たちの創作意欲への刺激を促したと言えよう。

第32号（1974・3）には金子兜太の原稿が掲載されている。これは、金子兜太の主宰する「海程」の同人であった崎原風子の依頼によるものと思われる。前述のように、崎原は「海程」の第2回新人賞を受賞している同人であり、『あるぜんちん日本文藝』の編集責任者であった。金子の掲載作は「放哉と山頭火」という俳句論で、ともに自由律俳句で体表的俳人となった尾崎放哉と種田山頭火を取り上げている。

放哉は、じっと内から自分の肉体を見ているが、山頭火は見るよりも先に自分の肉体を動かしてしまう。(略) 山頭火には、おのずからなる放浪者の面貌があり、放哉には、それにくらべて、余儀なくされた放浪者の悲哀がつきまとっていた、ともいえよう。

放哉と山頭火の比較からその特徴を代表句を並べて指摘し、自由律への志向を宿命的な観点から述べていく。そして、俳句という言語芸術に携わる者の内面世界に触れ、その共通性として次のようにまとめている。

凝縮といい、緊張といっても、それは内面に拘泥している状態であって、内面から離れてはいない。だが離れるときもある。それは瞬間のことかもしれないが、そのときの二人の詩は、さらに短さへ向う。

俳句が備えている規定、季語や韻律からの安易なる脱却を戒めるような、強烈な個性の二人を論じている俳句論を掲載することで、『あるぜんちん日本文藝』寄稿者たちへの更なる創作意欲の促進を目指す編集側の意図が含まれていよう。現役の著名日本人俳人の寄稿を掲載出来る媒体としての意味も大きかったと思われる。また、第50号(1980・7)の「日本文芸ニュース」には、同人会員の房本徹が講談社の募集した『昭和万葉集』に一首入選した旨が記されている。

6. 沖縄との関係

1972年は沖縄施政権返還の年である。ブラジルに限らず、アルゼンチン日系移民も沖縄出身者の割合は高い。そのため、沖縄県本土復帰という事実を我が事として受け取っている。第22号(1972・5)では「沖縄県・ようこそ……—伝統文化の粹を担った人々—」特集が組ま

れている。通常の『あるぜんちん日本文藝』は新聞紙1枚、両面2頁なのだが、この号は3枚6頁にわたる特集であった。

ドメニコ・ガラナ「私の中の『おもろさうし』」、菊地凡人「琉舞『花風』の魅力」、神谷仁衛「琉球三味線考」、中村点心「山之口まぐととその詩」、大城光三郎「沖縄文学と芥川賞」、上江洲智英「琉球に於ける眞宗法難事件—仲尾次政隆の横顔—」、米須清周「沖縄終戦後の演劇情況」といった、幅広い沖縄の伝統芸能を範囲とした、同人の執筆記事を掲載した大特集であった。

例えば、「山之口まぐととその詩」では、下層生活者としての詩人の人生と、山之口の「会話」や「がじまるの木」といった詩篇8編を紹介し、日本の中央詩壇で確固たる位置を築いた郷土詩人のポエジイを記述している。「琉球三味線考」は、沖縄三味線の起源と、中国大陸を経由しての伝達史、三味線の種類とそれにまつわる伝説など、大変示唆に富んだ、資料価値もあるものである。

『あるぜんちん日本文藝』の『らぶらた報知』紙との緊密な関係は前述した。『らぶらた報知』紙はその創刊から沖縄出身者たちによってなされたものであり^(註5)、アルゼンチン現地のニュースを日本語で理解するため、また今後のアルゼンチン日系社会共存のための在亜邦人間のニュース、そして敗戦後の日本の、ひいては沖縄各地の事情を伝えることを第一の使命としたその性格は、現在まで一貫している。初代社長の平良賢夫と二代目社長の比嘉良秀だけでなく、当時『あるぜんちん日本文藝』編集責任であった崎原朝一と編集者の大城光三郎も「うちなーんちゅ」であったことも一つの要因である。

また、琉歌の掲載をよくしたことも大きな特色として挙げられよう。第39号(1975・11)には「第一回琉歌コンクール入選発表」が特集として生まれ、入選作品が発表されている。

一席

玉城おう鳴

七色ぬ海に海洋博結で黄金雨降らすわした沖縄

二席

夢想老

別れ路の涙我が胸に溜て乾く間や無さみありが形見

三席

宮地刀葉

らぶらたの流れ干瀬や見らぬ流れ登る月しらの影も見らぬ

沖縄国際海洋博覧会は、沖縄県の本土復帰記念事業として、沖縄県国頭郡本部町で1975年7月から開催された。開催によって、沖縄県の列島改造というべき開発が劇的に進んだ。地域経済促進の起爆剤となるはずだった海洋博、といった、沖縄で開催されている出来事を扱った題材と、アルゼンチンならではの「らぶらたの流れ」を読み上げた作品が選ばれ、受賞・掲載された。

また、崎原風子「琉歌を見直す意義」も掲載されている。アルゼンチン・サンタフェで開催された「日本文芸全国大会」において琉歌部門を設けたことがきっかけで、琉歌が少しずつ注目されてきており、それは日本の明治政府が断行した「琉球処分」による沖縄の「近代化」が生み出した、アンチノミーとしての沖縄アイデンティティの発見としての琉歌であり、ラテンアメリカの地における、ヨーロッパに対するアイデンティティの発見と同列と見ることが出来るのであり、沖縄文学を日本文学史に組み込むように、「あるぜんちんの日本文芸に、あるいは大きく南米における日本文芸に琉歌が重なっていくこと」が、これからのアルゼンチンの地での日本語文芸のダイナミズムが引き起こされるための方法であることを提唱したものであった。

さらに第41号(1976・7)では、「アルゼンチン日本文芸会」が沖縄連合会25周年記念琉歌大会の後援を行うことになった旨を掲載し

ている（「日本文芸会ニュース」）。そして、第50号（1980・7）記念行事として開催された「詩歌コンクール」では、第一席は「沖縄県人連合賞」として設置され、大城清治が受賞している。

摩文仁岬

干瀬に寄す波や白百合とまがふ御霊慰みる神の恵み

この琉歌には「無言に戦争の悲惨さを語りかける塔の並ぶ岬に立つて対象におぼるることなく「おもひ」をかくまで調べ高く詠いといった技量は立派である」との選評が付された。

第28号（1973・7）には大城立裕が来亜した事柄が掲載されている。現役芥川賞作家の来亜は、沖縄県知事や沖縄県議会団一行との同行であり、アルゼンチン側は沖縄県人連合が出迎えた。しかし、大城の本来の来亜目的は、県民移民史編纂の資料集めであった。そのためか、アルゼンチン沖縄県人連合も大城のスケジュールを組んでいた訳では無かったようで、『あるぜんちん日本文藝』の編集担当である中村隆志（点心）が大城の案内役となった。そこで、在イタリア人で日本文学研究者のドメニコ・ラガナと大城との邂逅となった。ドメニコ・ラガナは独学で日本文学を学び、『あるぜんちん日本文藝』第22号には前述のように「私の中の『おもろさうし』」が掲載されている。また大城作品の熱心な読者でもあったため、話は弾んだようだ。大城の作品中の男女の会話しんじんが「深々」という語で表現されていることが印象に残ったと感想を述べるドメニコ・ラガナの文学センスに大城は驚愕し、大変刺激的であった旨、帰国後の便りに伝えている。同号の「日本文芸会ニュース」には、「芥川賞作家大城立裕氏が来亜した折、米須清周、中村隆志氏等はラプラタ博物館とタンゴを紹介」し、「また移民資料を集めるのに奔走、特に米須氏は二十余年前の演劇活動の仲間として旧交を暖めた」とある。大城立裕のような著名現役作家との繋がりを

持つことで、沖縄県の文壇、ひいては日本文壇との繋がりを形成していくことになったと考えられる。また、在アルゼンチンの団体との役割分担が構築されており、日本からの来亜著名人に対しては、「アルゼンチン日本文芸会」がディレクション的な役割を果たすようになっていくことが指摘出来よう。

7. 最終号へ向けての足音

途中何度か廃刊の危機がありながらも、『あるぜんちん日本文藝』は刊行を継続してきた。しかし第50号（1980・7）で大きな出来事が訪れる。編集を担当していた大城光三郎（大士路光）の急逝である。大城光三郎は1921年ペルー生まれ。沖縄第二中学を卒業後、熊本工業専門学校（現熊本大学工学部）に進み卒業している。1957年来亜し、1963年東京銀行ブエノスアイレス支店に勤務。『歎異抄』のスペイン語翻訳やガウチョ文学の傑作「マルティン・フィエロ」の翻訳も行っていた。『あるぜんちん日本文藝』では第36号（1975・1）から「アルゼンチン文学小史」を大士路光名で連載している。

移民一世の高齢化と死去に伴って、アルゼンチン日系社会の日本語話者の減少は明らかになっていたが、そんな中、会誌の編集作業が出来、日本文学のみならずアルゼンチン文学にも造詣が深い大城光三郎の急逝は、『あるぜんちん日本文藝』にとって大きな痛手であった。

翌第51号（1980・10）からは編集担当として増山朗^{あきら}が参加している。増山は、1919年2月北海道生まれ。札幌第一中学卒業後、北日本植民学校を経て、「昭和一三期」農業実習移民として1939年5月に来亜する。牧場労働や蔬菜栽培業を経て、晩年は「ニッパル図書部」の管理者として働いている。小説「南東の風は…」を『らぶらた報知』紙上に掲載したこともある作家でもあった。増山は、編集責任者の崎原よりも15歳年長であり、移民の先輩でもあり、文学関係者の長老たちの意見もあつての勧誘であった感もある。増山自身は入会に関して

次のように記述している。

去る七月、崎原文芸会長より、同会主催詩歌大会受賞の席に連なるように、又、文芸入会勧誘の意も含まれた書状をいただいた。(略)「増山も同人に誘ってやれよ」と言われたのは、あるいは久保田氏か菊地氏の発言であったかも知れない。又はラプラタ報知に載った吾小説「南東の風は」のあほりが同人諸氏の同情を買って「あいつも入れてやれよ」位の話になったのかも知れない。(略)私は其の場で、日本文芸会入門の束ばく代として本年度の幹事を務める様申し付かった。(「日本文芸入門次第」)

こうして、編集責任・崎原、幹事・増山体制が採られることになり、最終号まで継続していくことになるのである。

以降の号に目を通していくと、増山が『あるぜんちん日本文藝』刊行のため、苦心しながら改善を図ろうとしたことがわかる。らぶらた報知社に「印刷代」はしっかり支払いすることで、「印刷面は報知社、編集面は同人側」という業務分担をするべきと提言し、作品投稿の際、規定の原稿用紙を使用するよう、同人にも呼びかけている(「文芸誌について」第52号、1981・2)。そして、次年度の総会で議題に取り上げ、原稿用紙使用の件は承認されている(「文芸報告かたがた」第54号、1981・8)。

また、増山作品も数多く掲載されている。第62号(1983・10)には「平原の国のおとぎ話『聖イシドロ虎と狐の話』」を書いている。これは「口伝え人 もりち やなぎ」であり、それを増山が編集し、作品化したものである。この「もりち やなぎ」は、柳守治のことである。柳は1924年生まれ。埼玉県立熊谷商業高校を卒業後、東京海外植民学校に入学、卒業後第五次実習生として1944年渡亜、増山と同期の移民であった。破天荒な人物であつたらしく、日系移民の間で

は名物男として存在していた。「ガウチョ・ハポネス」と称されていたほどガウチョの言葉を解し、多くの伝承、民話、土地の物語を知っていたようである。1974年に交通事故で死去している。柳守治についての増山の記述は幾つかあり^(註6)、個人的な友情としてのみ書き付けているのではなく、アルゼンチンに渡った日系移民の、ある世代が共有していたモデルを、体現したように生きた人物として描写されているように思う。

他にも「GUALICHO」(第64号、1984・9)や「W・H・ハドソンの手紙」(第66号、1985・9)といった、史実を基にしながら、小説風に仕上げていくという増山の創作手法は、1989年に創刊される日本語文芸同人誌『ばちやま茶媽媽』にも継承されていくことになる。

8. 崎原風子について

俳人・崎原風子については、少数ながら専攻研究が存在する。それらは崎原俳句の異国性を指摘し、前衛性を述べることに終始している。ここでは、それらを踏まえながら、『あるぜんちん日本文藝』での崎原の業績を考えてみたい。

大石雄介の『崎原風子句集』(海程新社、1980・12)「解説」がある。この句集は、金子兜太の俳句結社「海程」同人の「俳句文庫」シリーズの一冊であり、「第一集 10 番目」の刊行である。筆者の大石はその企画委員の一人である。大石は「異国語の断片によって触発される、ひきつりや惑乱。そういうかたちで全的に実現することばや感性であったにちがいない。その構造を方法的にこの形式にとりいれた、これは克明な実験記録であった」と述べ、次の句をその例に挙げている。

い。そこに薄明し熟れない一個の梨
 〈赤い犬〉というジン嚙下するレー時間

原満三寿『いまどきの俳句』（沖積舎、1996・7）では、崎原俳句の「8」の用い方に注目している。

8月もっとはるかな8へ卵生ヒロシマ
8月都市へしらじらながれる蓄群イー

このような崎原の句に対して、原は「〔8〕は、一般的には数字としての8であり、無限軌道の8であるが、風子の場合のもっと複雑な音（沖縄では8はヤーチ、スペイン語ではオチョ、英語ではエイト、日本語ではヤ、ハチ、ヤッツ、それら全体としての音感、語感）や間（円環の境界）や形（無限、円環の重なり、重量）など、そういったもろもろの総体としての代替語として機能させようとする」とその作品創作意図を分析し、「これだけのことを「8」に負わせるのは、あまりにも言葉への依存が強すぎるという読み手の批判がすぐきそうである。だが、読み手は、そんなことを深く思う必要はない。一句の中に「8」という夾雑物が入り込んでいて、そのことが読み手にあるカタストロフィーを起こさせれば成功なのだ」と続け、作品を肯定している。

同種の前衛的俳句（大石の言う「実験記録」）は、『あるぜんちん日本文藝』においても『連作・ダミュの真の旅』（第21号、1972・3）と題して掲載されている。

ドー待ちながらギーである臨床的時間
る！！それは神を線の時間をクライ
う死の季節のなか性的な接尾辞・兎
の（オー セックスその匂いは屋根の上
い箱をたずさえ そ 口>がそれに連なる

これらの句は、同人内でも話題を呼び起こしており、第44号（1977・

4) では、「風子の俳句を語る」という、本人も交えての座談会が開かれている。

天城子 = あれは俳句ではない。詩だ。一種の短詩だね。

古丹 = 俳句とは見なされない。

勝子 = 俳句とは認めないね詩としては認められるけれども。

路光 = 僕も詩の一種と思っているが、風子が俳句だということで「俳句」の部に入れてある。

風子 = 金子兜太は僕の進む方向は認めているが作品はまだ認めていない。以前に兜太が「風子の作品には妥協しない」といったのはそのことを意味している。実験の段階と見ているようだ。

古丹 = 意味のない単なる音感の「い」の部分と他の意味のある部分とのつながりはどうなのか。「い」を無機として他の意味ある部分を有機とすると無機と有機との釣合いの必然はどこにあるか。

風子 = 無機と有機とがぶつかり、そこから発生する効果をねらっている。

古丹 = その効果はまだ出ていないと思う。

風子 = 僕も俳句に新しいリズムを生み出したいと思っている。それには在来のリズムをまずぶちこわさねばならない。僕はそのぶちこわしを今やっているんです。

勝子 = それは国語の乱れだと思う。アルゼンチンに住んでいるからそうなるのだろう。

古丹 = 自分のリズムにはまだなっていない。

風子 = そう、今実験途上にあるんです。(略) その上に新しいリズムを生み出していきたい。

天城子 = そう。それは将来の問題だ。

同人たちは「風子俳句のわからなさ」の前に、否定的な意見を述べている。特に全否定的な物言いをしている久保田古丹は、『らぶらた報知』紙上では「俳壇」の選者でもある重鎮であった。他にも画家としてアルゼンチン美術展にも入選しており、また漆芸家として、漆芸品修復作業のため北米出張している旨が『あるぜんちん日本文藝』（「日本文芸会ニュース」第41号、1976・7）に記され、久保田自身による随想として、アルゼンチン帰国後の報告記事も掲載されている（「マンハッタン狂想曲」第43号、1976・9）。井尻香代子「アルゼンチンにおける日本の詩歌の受容について」（『京都産業大学論集』、2011・3）では、久保田と崎原は、「アルゼンチン・ハイク協会」とボルヘス財団内の「アルゼンチン・ハイク・センター」を立ち上げ、日本大使館全国コンクール審査員を務めたことが記されている。ともに革新的俳句を目指す方向性が同一でありながら、逆に同一であるからこそ、久保田の崎原句否定の意見は大変興味深い。この時崎原は「アルゼンチン日本文芸会」会長の任にあり、「亜国の俳人たち」（第19号、1971・11～）を連載してもいる。つまり、アルゼンチンで試みられてきた俳句の歴史的意味づけを行っている時期でもあった。その姿勢は、後に『アルゼンチン日本人移民史』（前出）の編纂責任者や、『アルゼンチン沖縄県人移民史』の編纂責任者となることと一貫している。

さらに一つの特徴として、崎原は『あるぜんちん日本文藝』で俳句ではなく、かなりの数の自由詩を創作している。

あらゆる高さから
 あかるい同義反復
 三角形を擁立したがる
 未来という属性
 メンスの

午前八時だけが永久だ（「ビニールパイプ」部分、第1号、1968・9）

足・脚からあらわれる

ゲリラ運搬人 戦場のない

戦場で 円周率は

匙から匙へ薄められる（『八月六日』部分、第2号、1968・11）

他にも「固形スープたち」（第4号、1969・5）、「O氏の葬儀」（第5号、1969・7）、「六月の歌」（第12号、1970・9）といった新散文詩や、「B五二・石・勃起する塔乗者へ」（第7号、1969・11）に掲載された「言葉のない世界へ地下茎のように／おまえは垂直に下りることはできない／言葉の世界へ血液のように／おまえは垂直にのぼることはできない」といった、横への拡大性を持たない垂直的世界を、自由詩で描いていく。詩という表現ジャンルから、規定のある俳句ジャンルへの越境。それは、言語創作を行っていく上でのより一層の困難への挑戦であり、実験的姿勢の一環と考えられる。そこには不自由さゆえに獲得することの出来る自由がある。崎原風子の前衛性は、アルゼンチンに居住することで生まれ得たなどという、ヨーロッパ的視点によるエギゾチシズムに集約されるものではない。確かに崎原がアルゼンチンに居住していることを無視出来るはずはない。しかし、「日本語消滅の危機」が述べられ、日本語延命策を採ろうとするブラジルの「コロニア」社会に対して懐疑を持つ崎原は、「日本語消滅」の行程に自身の歩む道を見ざるを得ない。その場所は異文化混合など当たり前の前提でしかない、「季語定型」へのこだわりなど「日本文化」の再現でしかない場所であったのだ。アルゼンチン日系社会の歴史を知ることと、前衛性を選択することは矛盾しない。「日本」から自由である境界に佇む者としての自己認識は、他の者たちからは「前衛」（=わ

からないもの)として認識されることになる。そして、日本語教育の規定も定まっていない地においては、その実験性は、「日本語の乱れ」として評価されるしかなかったのである。「前衛」は前衛であり続けるしかない。後退は許されないのである。アルゼンチンという異文化の地で、崎原は真の「前衛」として、「日本語の境界」に進み続けることを選択する。「前衛」であることが「実験途上」とされる中で日本語創作を行うため、崎原は「8」という無限軌道の世界に身を置いたのである。

まとめ

『あるぜんちん日本文藝』は、16年以上続いた、大変息の長い文芸同人誌(紙)であった。日系移民の総数は3万人程度であり、創刊当時からその数はあまり変化していない。南米大陸の中でも、ブラジル、ペルーに次いで3番目という日系社会の規模を考えると、その刊行年数には驚愕せざるを得ない。関係者、特に編集作業に関わった者たちの、弛みのない超人的な努力と、無報酬でも行われた献身性と刊行への執念、そしてアルゼンチンにおける日本語文芸を担い続けているというプライドが無ければ継続されなかっただろう。現在もアルゼンチン唯一の邦字新聞として刊行し続けている『らぶらた報知』社をその事務所としていること、新聞媒体と連携しての発刊であったこともまた継続することの出来た要素の一つで言ったと言えよう。

さらに『あるぜんちん日本文藝』は、短詩型詩歌に留まることなく、自由詩、小説、随筆といった散文も掲載した総合文芸誌であった。他の国々の日系移民社会では、句会、歌会が数多く作られ、同人句誌・歌誌も発行されていることは枚挙に暇は無いが、全ての文芸ジャンルを網羅している文芸同人誌はほとんど無いと言えるだろう。

そして、同人制を採り、同人会費を集めて発行し続けたこともその特徴として挙げられる。また、ブエノスアイレスやその周辺の都市部

に限らず、アルゼンチン全土から作品投稿があったこと。特定の団体の機関誌になることなく、自分たちの費用で運営し（らぶらた報知社の全面的協力のもと、という条件ではあったが）、都市部周辺の居住者に限ることなく、広く同人参加を呼びかけた開放性と自立性があった。そのことは固定化された執筆者のみではなく、新人が数多く執筆し、同人の代謝が行われたことにも繋がっていく。

さらにラテンアメリカの国々、特にブラジルの日本語文壇との繋がりがあったことが挙げられる。特定の同人との個人的な繋がりに還元されるのではなく、「アルゼンチン日本文芸会」として対応し、『あるぜんちん日本文藝』に記事掲載をしていることは重要な点である。

また、日本文壇との繋がりを持っていたこと。日本文壇の紹介の性格も備えていたことや、沖縄県人連合会など、アルゼンチンの日系組織との繋がりがあったことも同様の効果と意味があったと言えよう。

そして、終刊後も、同人たちはアルゼンチン日系文壇を形成していることも大事な特徴である。『あるぜんちん日本文藝』が終刊し、アルゼンチンの日本語文芸が消滅した訳ではない。様々な県人会誌や機関誌などに発表された作品もあれば、『らぶらた報知』、『亜国日報』といった邦字紙文芸欄にも、日本語文芸作品は掲載され続けている。さらに、最後の編集者であった増山朗と、新たな若い日系移民たちが創刊した『巴茶媽媽』へと続いていった系譜を、我々は確認することが出来るのである^(註7)。そのような人材を育成した結果となったことは、大きな存在意義があったと結論付けることが出来る。

これらのことから、『あるぜんちん日本文藝』が戦前からのアルゼンチン日系社会における、文芸活動の集大成として存在した文芸同人誌（紙）であったことがわかる。

（もりや・たかし 法政大学大学院兼任講師）

本論文は、2011年度科学研究費補助金「南米日系移民および韓国系移民による文学に関する総合的研究」（基盤研究C）による研究成果の一部である。

2012年8月に行った研究調査の際、多くの方々にお世話になった。アルゼンチンの研究においてお世話になった方々、崎原朝一氏、久田アレハンドロ氏、高木佳奈氏、土井英明氏、秋月巖氏、宮本俊樹氏、チョン・ギウン氏、ハン・ヨンス氏。この場を借りて改めて皆様に感謝を申し上げます。

〔註〕

- 1 賀集九平の著作には『アルゼンチン同胞五十年史』（誠文堂新光社、1956・12）もある。
- 2 『あるぜんちん日本文藝』第66号以降も「アルゼンチン日本文芸会」は続いていくが、会誌『あるぜんちん日本文藝』は刊行されることは無かった。同人の作品は『らぶらた報知』紙面の「文芸欄」に掲載されていく。
「この度従来の新文芸欄を改め、より広く初心者、同好者と日本文芸同人を対象にした「文芸欄」を設け、文芸作品を募ります。（略）発表＝二か月に一回、部門別に発表。投稿先＝らぶらた報知社、担当・日本文芸会、らぶらた報知社」（『らぶらた報知』1986・10・23）
といった「文芸作品募集」記事も掲載されている。
- 3 中村定は、元『週刊新潮』記者で、当時はフリー文芸評論家であった。
- 4 ニッパル図書館については、『アルゼンチン日本人移民史 第二巻戦後編』（前出 233～244頁）に詳しい。
- 5 『らぶらた報知』創刊の事情については、『アルゼンチン日本人移民史 第二巻戦後編』（前出、37～38頁）に記載されている。
- 6 増山の柳守治についての記述は、『『昭和一三期回想』（『牧笛 アンディノ・クラブ五十年記念誌』1985・7）、『風来坊「ドン・サウセ」ことヤナギ・モリジ夜話』（『巴茶媽媽』創刊号、第2号、1990・2）、『風来人柳守治の足跡』（『アルゼンチン日本人移民史 第一巻戦前編』2002・6）がある。

7 拙論「アルゼンチン日本語文学論——『巴茶媽媽』について——」（『異文化』13号、2012・4）を参照されたい。